

東京の観光振興を考える有識者会議 議事録

令和8年2月10日（火）13：15～14：45
都庁第一本庁舎7階大会議室

【江村観光部長】

お待たせいたしました。これより東京の観光振興を考える有識者会議を開会いたします。

本日は、御多忙の中、御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

議事に入るまでの間、私、産業労働局観光部長の江村が進行役を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、本日の資料を確認いたします。

お手元には、議事次第、座席表、資料1の委員名簿、資料2の本会議の設置要綱、また、堀口委員に監修いただいた「江戸東京マップ」を来月からの配布に先行してお配りしております。その他の資料につきましては、卓上のタブレット端末で御覧いただけます。

続きまして、委員の皆様の出席状況を御報告します。

本日は、委員15名中10名の皆様に御出席いただいておりますが、マリ委員につきましては遅れて御到着の予定でございます。出席者の御紹介につきましては、座席表の配付をもって代えさせていただきます。

また、本日は、ゲストスピーカーの方にもお越しいただいておりますので、御紹介いたします。

公益財団法人日本交通公社観光研究部主任研究員の後藤健太郎様です。

【後藤氏】

よろしくお願いします。

【江村観光部長】

後藤様からは後ほどプレゼンテーションをいただきます。よろしくお願いいたします。

それでは、この後の議事進行につきましては、篠原座長にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

【篠原座長】

それでは、早速ですけれども、会議を進行させていただきます。

まず初めに、小池知事から御挨拶をいただければと存じます。お願いいたします。

【小池知事】

皆様、こんにちは。小池でございます。ようこそ御参加いただき、ありがとうございます。

昨年インバウンド、日本を訪れた外国人旅行者ですが、4,268万人で過去最高となりました。また、旅行消費額のほうも、ざっくり言うと10兆円、9.5兆円でございますが、これも大変大きな経済効果をもたらしてくれているということでもあります。

世界においても、やはり東京は観光の行き先としても評価が高いということ

で、今日は、御覧いただいておりますこの3つですけれども、これはサウジアラビアの政府が、200ぐらいの都市を評価して、食とエンタメで、それぞれ最高点で、この真ん中のものはそれをひっくるめて最高点ということで御評価いただきまして、リヤドのほうで授賞式もございました。こうして幾つかのランキングにおいても東京都は大変高い評価をいただいているところでございます。1,000件を超える観光地の中から選んだということでもあります。

それから、世界の都市総合力ランキング、こちらのほうではニューヨークを抜いて第2位ということで、特にナイトライフの充実度が1位となったということでございまして、有識者会議のほうで東京のナイトタイム観光に対しても様々な、これまでも知見を頂戴してまいりました。いろいろな成果が出てきているということで、改めて感謝申し上げたいと思います。

そして、つい先日、ローマとパリを回ってまいりました。それぞれ会議で、パリではOECDの会議に出て、また、ローマは、東京とローマの姉妹都市関係が30周年ということもございまして訪問してまいりました。それぞれ観光地としても、世界の中で名だたる観光地でございますけれども、それぞれ色々な工夫をしていて、参考になるところがたくさんございました。これからもそういった例も参考にしながら、東京の観光をさらに進化をさせていきたいと思っております。

そこで、今日は東京の観光振興を考える上で、観光客が増加する中で生じる様々な課題への対応ということで、公益社団法人日本交通公社の後藤様にお越しいただいております。ゲストスピーカーとして、都市と生活の調和に向けた世界各地の事例を御紹介いただけるということで、よろしくお願いを申し上げます。

まずは冒頭の御挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

【篠原座長】

知事、ありがとうございます。

それでは、本日の議事でございますけれども、まず事務局から資料の御説明をいただき、続きまして後藤様からプレゼンテーションをしていただくという流れになります。その後に皆様から順次御発言をいただきたいと考えてございます。

それでは、まず事務局より資料の説明をお願いいたします。

【前田観光振興担当部長】

観光振興担当部長の前田です。

それでは、資料3「今後の東京の観光振興に向けた施策について」御説明いたします。

初めに、観光を巡る動向です。2025年の訪日外国人旅行者数は4,268万人、消費額は約9.5兆円と、それぞれ過去最高を更新しました。グラフのグリーンの数

字は東京です。東京にも多くの旅行者が訪れ、消費額が伸びています。

こうした中で、昨年は著名な旅行雑誌のランキングや、今知事からもお話がありました海外の観光アワードでもトップとなりまして、東京の魅力に対する世界の評価が高まっております。

次に、今年度の取組状況です。ナイトタイム観光については、有識者会議で整理した3つの方向性に基づき、事業を展開しています。

1つ目の民間の力などを活かした多彩な夜間コンテンツの提供では、光のコンテンツによる誘客や夜間・早朝イベントなどの支援に取り組んでいます。

2つ目の地域に根差したナイトタイム観光の充実としましては、ナイトタイム推進エリアを設けて、地域の自治体等への支援を開始したほか、ナイトタイム観光フォーラムでは牧野委員にも御講演をいただき、ナイトタイム観光の推進に向けた都内各地域の取組や課題を関係者で共有をしています。

3つ目のより快適なナイトタイム観光に向けた旅行者サポートの強化では、ホームページ、Tokyo Night Storyをリニューアルいたしまして、レジャーやアトラクション、水辺やアートなど、テーマごとに東京の夜の過ごし方を提案する情報発信を開始いたしました。

続きまして、江戸の歴史・文化を活かした観光の推進です。こちらも有機者会議で整理しました3つの方向性に基づき、事業を展開しております。

1つ目の「江戸」を知るとして、都民や観光関連事業者に江戸の歴史や文化の魅力を知っていただくイベントやセミナーを行っております。

2つ目の「江戸」を発信するでは、机上にもお配りいたしました「江戸東京マップ」を作成するとともに、日本各地の城など、江戸時代の史跡等を海外に発信するサイトを開設いたしました。また、3月31日の江戸東京博物館のリニューアルに向けた開館100日前企画などの発信を行っております。

3つ目の「江戸」を楽しむでは、食のイベントに江戸ゾーンを設置いたしまして、江戸前の寿司や浮世絵の装飾を展開したほか、地域の江戸の文化財を観光資源としてツアーなどに活用する取組を支援いたしまして、地域住民の保全意識を高めるとともに、来訪者が江戸の文化財の魅力に触れる機会の創出を目指しております。

次に、この後、後藤様からプレゼンテーションをいただきますが、観光と都民生活の調和に向けた都の取組についてでございます。赤字で「新」と書いてあるものが来年度の新規事業です。

これまで、旅行者へのマナーや日本の習慣の紹介、都民の受入機運の醸成などに取り組むとともに、多摩・島しょ地域への誘客やナイトタイム観光の充実などにより、観光需要の地理的・時間的な分散を進めてまいりました。

来年度は、AIを活用した混雑の未然防止、リサイクルステーションの導入支援や区市町村等が取り組むマナーの啓発、ごみのポイ捨て対策などに新たに

支援をいたします。

続いて、宿泊税の見直しについてです。観光の状況をはじめとした宿泊税を取り巻く環境の変化を踏まえた見直しを図ることで、持続可能な観光振興を財政面から支えていくため、東京都宿泊条例の改正を予定しております。

改正内容は以下の５点でございます。

１つ目は、宿泊税の用途を都の観光施策に関する計画に基づく施策とすることを明確化いたします。この計画とは、この有識者会議で御議論をいただいております「PRIME観光都市・東京 東京観光産業振興実行プラン」でございます。

２つ目は、課税対象に簡易宿所と民泊の利用者を追加いたします。

３つ目は、課税免除基準の額を現行の一人１泊当たり宿泊料金１万円未満から１万３,０００円未満へと引き上げます。

４つ目は、課税方式を定率制に変更いたしまして、宿泊料金に３％を乗じた額を税額といたします。

５つ目としまして、申告納税の手続につきまして、３か月に一度の申告とする特例申告の要件を緩和いたします。

今後、総務省の協議などを経まして、令和９年度に施行する予定でございます。

令和８年度予算におけます宿泊税充当事業の例は御覧の表のとおりでございます。ごみのポイ捨て対策など、観光と生活の調和に向けた取組をはじめ、受入環境の充実などに向けた観光施策に充当されます。

最後に、令和８年度東京都の観光関連の予算案です。観光施策全体の予算は３７６億円、都民にも旅行者にも魅力ある観光都市・東京を実現するため、ナイトタイム観光や多摩・島しょの新たな魅力の創出など、様々な取組を展開いたします。

また、都民生活や都市環境と調和の取れた観光振興を実現するため、都庁内の関係の部局とも連携をいたしまして、先ほど御説明をしたごみのポイ捨て対策のほか、住宅宿泊施設、いわゆる民泊の適正な運営に向けた事業などに取り組んでまいります。

以上の説明を踏まえまして、本日の論点として、「観光と生活の調和について」どのような取組を行っていくべきか、今後、東京の観光が持続的に成長していくために、都の観光施策において留意すべきポイント、取り組むべき課題は何かにつきまして、後ほど委員の皆様から御意見をいただければと思います。

事務局からの説明は以上でございます。

【篠原座長】

ありがとうございました。

続きまして、後藤様からプレゼンテーションをいただきたいと存じます。後藤様、よろしくお願いいたします。

【後藤氏】

公益財団法人日本交通公社の後藤と申します。本日は貴重な機会をいただきまして、ありがとうございます。

今日は、「観光と都民生活の調和」と題して、世界都市・東京が未来に向けて観光とともに輝き続ける、そのためにはどういう視点が必要なのかを少しまとめさせていただきました。

会社紹介となります。当財団、60年ほど観光旅行の調査研究を行ってきております。「観光文化」という冊子を発行しており、その中で世界の都市等も扱いながら情報を発信しています。

今日の本題、「観光と住民の生活の調和」というテーマで、最初にどのような視点、視野でお話しするかということをお話しさせていただければと思います。

観光を都市の成長、持続的な成長につなげていく、そのためには観光の好影響を引き続き保ちつつ、望ましくない影響が過度になる前に即応策を構築していくということが必要になります。また、バランスを測りながら、予防しながら、観光客とともに地域をつくっていく、そうした仕組みを整えていくことが重要だと思っております。

このスライドで整理しておりますのは、例えば、延べ宿泊者数という、需要側を見るということもあれば、成長していくに当たっては、供給側もともに成長しているのかも併せて見ていくというようなところをここでは示しております。

さらに、それらが住民が暮らす場や働く場に観光が織り込まれていきますので、そうしたときにどのような状況になっているか。ここでは、例えば延べ宿泊者数を1日当たりにしたらどのくらいなのかということを出しているのですが、どのような対象を見ながら全体のバランス、調和を図っていくのか。そのところを少し掘り下げたいと思います。

今、需要側・供給側というお話をさせていただいたのですが、ここでは「住民」「観光客」「産業」、そして「環境」という4つに整理しております。「観光客」でしたら、例えば閑散期にどうするのかといったら観光客の「量」に働きかける、例えば「質」だったら観光客の単価に働きかけるということもあれば、マナー問題に対応する。それぞれ「量」と「質」があり、あと1つ、私は変化の「速度」というのも併せ持つて見ていくということが持続的な成長を考える際には重要というふうに思っております。

こうした持続的な成長、観光という外からのエネルギーを取り込んで東京都を発展させていく、成長させていく。成長していく中では「成長痛」というのも発生することもあるかもしれません。そうしたときには、緩和していく、和らげていくというような対応が将来必要になってくるかと思っております。

本日は、ここからは、この図の中の一番上の住民というところを念頭に置いてお話をさせていただきます。

観光の中で、住民との調和というのと、どちらかというとネガティブな側面が注目されてしまうというふうなこともあったりします。でも、そうしたところだけではなくて、観光を通じて住民の暮らしを豊かにしていく、そうした視点までを視野に入れて、お話しさせていただきたいと思っています。

便宜的に3つに分けております。表面化する問題、目に見えてすぐに体感できる、観光客による混雑や交通渋滞、マナーの問題、ごみの問題、そうしたものがあろうかと思っています。

2つ目に整理しているのは、場所の変容だったり、あるいは複雑化していく問題への対応ということで、例えば観光客向けの施設が増えてしまって、なじみの店舗がなくなってしまうとか、そういうようなところを防ぐ、徐々に静かに進行していくものにどう対策するか。

こうした負の側面に対して、どう対応していくかではなくて、観光客が来て、アプローチして、参加する仕組みや観光の恩恵を還元したりして、観光客との関係を再構築して、共に地域をつくっていくんだ、そうしたところに向かうような形の調和を視野に入れながら、お話しさせていただきたいと思っています。

まず目に見える問題として、交通渋滞やマナーの問題、ごみの放置とか、そうしたものが問題であるかと思っています。こちらは、先ほどお話がありましたとおり、既に各地で取り組まれているものかと思っています。テクノロジー・データ等を活用して、流動を見ながら対策を図っていく。マナーの問題に関しては、昨今ですと規範の制度化、条例等を用いて対応というものが確認できます。これらは既に確認されているものではあるのですが、改めて海外でどのように対応しているかということをご紹介させていただければと思います。

例えば、観光客が1つの場所に集中しないように、オランダのアムステルダムですと大型バスが中心部に乗り入れないようにするとか、あるいはガイドツアーで最大15名までにしますよというような形で、集中を緩和する、避けるというような対策をとっていたりします。

そのほか、バルセロナでは混雑するエリアを設定しておりまして、そこに対して交通動線を再整理していくとか、事前予約制を強化していくとか、あるいは空間の市民の利用の促進をしていく、そのような対策をとっております。

そうした対応の中には、観光客の管理などが入っており、例えばハワイのハナウマ湾等では、利用する方に教育ビデオの事前の視聴を義務化しているということもあります。観光客側に働きかける管理と教育というものもあるのですが、ポイントは、人気のあるスポットで住民のアクセスをしっかりと確保していくこと。その方法は様々で、例えば予約不要とか無料とか、住民の専用時間を設けますよとか、あるいは住民の専用スペースをちゃんと確保しておく。そうした

対策がとられています。住民が住むということ、アクセスする、移動する、そうしたことに対して、どう住民の生活を守っていくのか、そうしたことが行われております。

より踏み込んだ対応、それなりに問題が起こっているからということにはなるのですが、韓国の事例ですと、例えばソウルにある伝統的な住宅が並ぶところでは、地域を4つの地域にゾーニングしています。レッドゾーンでは制限時間、夕方17時から翌朝10時までは訪問を制限するという対応をとっています。こうした対応をとっているのはなぜかという、そこに住んでいる人が騒音などで転出してしまっているというようなところまで過度に問題が起きているからです。あくまで過度になっているというところであり、繁華街ではなくて住宅地というところで、どういう対応をするかという話となります。

今の話に続くのですが、ここでは「徐々に静かに進行するもの」というような書き方をさせていただいております。都市の生活環境の質を維持するためにどうするか。「観光モノカルチャー化」や「ジェントリフィケーション」という、日本語で耳慣れない言葉を書いております。例えば地域の八百屋さんだったり、本屋さんだったり、生活で利用している施設が観光客向け店舗になってしまうとか、あるいは生活利用のものが観光利用に置き換わり、家賃が高騰して転出してしまったりとか。そういうところにまで海外だと来てしまっているところもあると分かっている中で、未然にどう防止するか、対策するかということの参考になればと思っております。

例えばアムステルダムの場合は、生物多様性ではないですが、小店舗の多様性をどう保持していくか、確保していくか。あくまで過度に進んだ場合というふうに捉えていただければいいのですが、観光客のみを対象とした新しい店舗や施設の出店を不許可にするというような対応もとっていたりします。

宿泊施設については、例えばバルセロナでは4つにゾーニングして、規制するところ、誘導するところというような形をとっていたりします。あるいはこれはあくまで観光による影響の場合ですけど、住む権利を確保するために、住民の住宅確保、600平米以上の開発の際にはその床面積の30%を低家賃の社会住宅に割り当てますよというような形で、住民の「住む権利」をどう確保していくか、そのような点まで見られております。

そうした問題をどのように客観的に測っていくのか、検知していくのか。例えばアムステルダムでは、バランスの取れた観光条例を2021年に制定しています。そこでは宿泊者数の上限と下限を設定しております。下限は1,000万人、上限は2,000万人としておりまして、毎年、需要予測を行っています。そのときに予測が、例えば上限が2,000万人だったとしたときに、それより200万人少ない1,800万人を予測値が超えてしまった場合は、では次どういう対策をとろうかというような形としています。例えば6か月以内にどういう対応をするかという

ことを提案するような形で、時限を設けながら政策意思決定プロセスをシステム化するというようなことを行っております。

ほかにも、観光収容力という形で、2年に一度、110の地区を測定しております。右下の図のように診断結果をこのような形で描いて、その診断結果に基づいて、どういう対策を行っていくのかということを細やかに行うということになっております。

こうしたデータというのは、例えば日本国内ですと、京都市さんでは「観光の効果の見える化」する冊子をつくって理解を深めていたり、あるいは多面的に把握するということで、EUでは、観光だけではなく、より広い指標を扱う、ツーリズムダッシュボードというものをつくっていたりします。こうしたものを整えていって、早期に検知するというところを行っていくという対策もございます。

今までのところは、どちらかというとネガティブな側面にどう対応するかというような話だったのでした。ここからは、観光客とどういう地域を一緒にやってつくっていくのか、そうしたときにどういうことが行われているのか、という視点でお話しさせていただきます。

やはり観光魅力のある都市に住むということの価値をどう生み出すかということかと思えます。例えば観光客が参加・貢献できる仕組み、単に消費者として捉えるだけではなくて、地域の自然・文化の貢献、住民の方も取り組んでいращやる、そうしたものに参加・貢献する主体としても位置づけて、関与そのものを旅の価値としていくとか、それ以外にも、住民の方に恩恵をどのように還元していくか、サービスをどう行っていくか、そうした取組がございます。

19ページではハワイやコペンハーゲン、あるいは日本の事例を紹介させていただいております。私どもの職員も、このハワイのボランティアプログラム、清掃のプログラムにも参加させていただきました。そこでは、終わった後に地域の方から「あなた、パートナーですね」というふうに、観光客というよりもパートナーというふうな捉え方で地域の方に喜んでいただけたと。そうした関係を、新たな関係をどのように生み出していくかということも将来に向けては考えていく必要があるのかなというふうに思っております。

続きまして、観光地での住民向けサービスという意味では、例えばハワイ、日本の中では北海道の倶知安町などでは、住民向けのサービスだったり、あるいは京都市さんは、住民への情報やサービスを一元化するポータルサイトをつくって情報提供するというような取組をされています。

そのほかにも、住民との対話やコミュニケーションをどのように行っていくのか、あるいは観光の恩恵をどのように配分、還元していくのか、そうしたことが取組として考えられます。

住民を対象とした割引というような形もあるのですが、逆に、観光客の方が

来ているということで住民の数にその分上乗せして何ができるのかという発想もあるかもしれません。例えば、先ほどのツーリズムダッシュボードですと、観光の圧力が高いというところがありました。しかし、高いからといって、どうして深刻化していないのか、そうした視点でデータというのを見ていく必要があると思います。

例えばオーストリアのチロル州ですと、住民の利用するウェルネス施設や交通、そうしたものに合わせて観光の収益や観光財源を投じていく、合わせて共有の空間、共用するものをつくっていくというような発想だったりします。日本の中でそうした発想をしている、大分県の由布院温泉というところがあります。ここは人口1万人ぐらいですけど、外の人の力を借りて、自分たちの実現したいこと、要望だったりをカタチづくっていく。地域の方は「地域のブランド力を磨く」というような言葉を使っていたりします。そうした発想もこれから必要になってくるのかなというふうに思います。

改めまして、最後にまとめです。本日は、事例をバラバラと、地域単位ではなく取組を分解してのご紹介となりました。別の言い方で3つの取り組みを申し上げますと、1番目の「表面化する問題」は何かというと、例えばコンテンツを提供するとか。これはパソコンの画面やスマートフォンの画面にあるアプリケーションをどう作り利用するかというようなことになるかと思います。そうした中にマナー問題への対応というのものもあるかと思います。

続いての2番目につきましては、スマートフォンやパソコンなど、OSというものがあると思います。オペレーションシステムをどうするのか。先ほどのお話ですと、データというもので多面的に変化などを検知していく、さらにそれをもとに、例えば意思決定をどうしていくのか。アムステルダムの場合は意思決定プロセスをシステム化する、そうしたことを行っていたかと思います。

3番目は、基盤をどうするのか。アプリケーション、OS、基盤、そうした中での基盤とは、観光においては「地域のコミュニティ」だと思っています。コミュニティ、価値観、どういうものを大切にしているのか、どういう観光客を受け入れていくのか、観光で何を得たいのかというところを、それぞれが考えていくようなところが必要になってくるかなと思います。

加えて、取り上げさせていただいた事例の地域、都市、観光地と東京都が異なるところって何だろうというふうに考えました。人口1,000万人以上いる中で、旅行市場として一つ大きな市場であり、自分たちも旅行者としてほかの地域に受け入れてもらって初めて旅行できている。今日私がお話しできるのも、そうしたほかの地域で受け入れてくださる方がいて、こういうお話ができています。自分たちも受け入れられているというところをしっかりと認識したり、理解した上で、では「ほかの方をどう受け入れていくのか」というような意識の醸成を行っていくのか。そうしたところも東京都の持続的な観光の成長という

ことを考えたときには、そこまでを視野に入れておくということもあるかなというふうに思っております。

私の発表は以上です。ありがとうございました。

【篠原座長】

後藤様、ありがとうございました。

小池知事はここで御都合で御退席となりますが、もし御感想などございましたらお願いいたします。

【小池知事】

ありがとうございました。いろいろまとめて分析をしていただきました。

最後のところで「共創」という言葉を使っていらっしゃいましたが、例えば三社祭とか、おみこしを担ぎに毎年来ていますとか、祭礼文化というのは江戸の場合、これは宗教でもあるんですけれども、でも、それを置いといても、参加することに楽しみを見出して毎年来る方がおられる、リピーターをどう確保するかというのも大きなテーマなんだろうと思いますし、また、そういった方々にしっかりどう発信するかということも重要かというふうに思います。

これからも、この観光産業はまさに、東京だけでも10兆円という大きな額になっていますし、ここをさらに成長軌道に乗せていくためにも、これからも皆様の御意見、また、御提案いただければと思っております。

どうもありがとうございました。

【篠原座長】

知事、ありがとうございました。

では、知事はここで御退席となります。ありがとうございました。

【小池知事】

失礼します。ありがとうございました。

(小池知事退室)

【篠原座長】

それでは、意見交換に入りたいと思います。

意見交換のポイントは、先ほど東京都事務局からの資料の最終ページにございましたけれども、「観光と生活との調和について」どのような取組を行っていくべきかという点と、それから、今後、東京の観光が持続的に成長していくために、都の観光施策において留意すべきポイント、取り組むべき課題は何かという、この2点を中心に、後藤様のプレゼンテーション内容も踏まえながら、皆様から順次、御意見をいただきたいと存じます。

時間が限られておりますので、お一人5分程度でお願いをしたいと存じます。準備ができた方から、この名札を立てていただきますと御発言の準備が確認できますので、できましたらそのようにしていただければと思います。

それでは、御意見いただける方、挙手、ボードを上げていただければと思い

ますが、いかがでしょうか。あるいは、順次御指名をしてまいりましょうか。

それでは、田川さんからお願いしてもよろしゅうございますか。では、田川委員、お願いいたします。

【田川委員】

ありがとうございます。

ほかの地域では、もう既に県民と、あるいは市民との調和ということに関しては、取り組んでいます。インバウンドのオーバーツーリズムという言葉はあまり好きじゃないんだけど、そういうことで地域地域では問題を抱えています。観光と生活の調和についてなんですけども、旅行者はみんな自分の自由な気持ちで来るんですけども、受け入れる側の、こちら側の意識が追いついていないというのが現実だと思うんですね。それで東京は、地域によって山手と下町で随分意識が違いますから、そういう意味で、ここにちょっと出たように、いろんな地域別に考えていく必要があるのがまず1つ。

それから2つ目が、これは意識改革が要るんだけど、東京都がいくらお話しされても、なかなか現実的に都民まで伝わらないでしょう。区の体制とか市の体制とか、地域ごとにこの政策を落とし込んで、23区で東商でも取り組んでいましたけども、じゃ北区ではどうするんだとか、台東区ではどうするんだとか、こういう話を進めていくべきで、もう1つは、私は福井で、ふるさと先生をやっていて、高校生の教育をやっているんですけども、都立高校とか区立中学校とか、そういうところでこういう話をできる、観光部の仕事じゃないんだけど、教育庁の仕事なんだけど、そういう教育をやったらいいいと思います。私は前、東商で芝商業高等学校でお話ししたんですが、結構お話が進んでいるんですね。芝商業の高校生は福井県の池田町というところに毎年訪問して交流しています。逆に言えば、そういうところから意識改革して、子どもたちから親に伝えるという方法を考えていく必要があるかなと。

というのは、中長期的な観点で、この調和ですね、それから清潔感みたいなものは、これは私も好きなんですけども、堀口さんも取り組まれています、江戸時代の日本の東京はきれいだったんですね。ごみを拾って和服のたもとに入れる様子を外国の方が見ていて、感動されました。東京の清潔感というのが、もともと江戸文化の中にあったと思うんですよ。朝寝朝酒じゃないけど、お風呂も大好きで。そういうのをもう1回、江戸文化の中で、文化財よりも生活習慣を江戸文化の中から取り上げて今に伝えるという、そういう取り組みもいいんじゃないかなと。時間はかかるんですけども、そういうものを5年間ぐらいの今度は中長期戦略の中では考えていく必要があるかなと。持続的に成長するためにも、その視点は必要だと思うんです。

個々の問題は、それぞれ後で皆さんが多分お話になるので、五十数年間この仕事をしていると、そういう大きな論点で、どうしても今、経済政策も含めて

目の前の話が多いんですけども、観光はやっぱり、海外旅行も、2,000万になるのに30年ぐらいかかっている、日本で。1971年のときは、まだ100万人でしたから。それが1,000万になるのに20年、2,000万になるのにさらに20年、そういう長いレンジで考えていくので、インバウンドの問題も、それから国内における観光業の問題も、そういう視点で考える。それはキーワードで社会性だと思うんですね。社会性的にこの観光の問題を考えていくということが必要なんじゃないかなと。ツーリズムは、単なる観光の問題から社会的問題に移ってきているというのがこれからの流れだと思うので、そういう流れを、パラの話もそうなんですけども、みんなそういう社会性のものに変わっているので、東京も観光の問題を、東京都のいろんな局がありますけども、全体で考えるような仕組みを考えていただきたいなというのが私の意見です。

以上です。

【篠原座長】

大変示唆に富む御意見、ありがとうございました。

それでは、お隣の小林先生、お願いしてもよろしゅうございますか。

【小林委員】

3つお話ししたいと思います。今回の観光と生活の調和というところは、僭越ながら大変重要な話だと思います。

後藤さんからも色々な各地の御紹介があったと思いますけれども、それぞれ出典も書いていただいておりますが、私もヨーロッパに、アムステルダムに3年間おりましたので、よく肌感でも分かりますけれども、20年以上前から、この観光と生活の調和というテーマは取り上げてやっていますし、具体的な政策も続けていますので、23ページですかね、アムステルダムは、オーバーツーリズムの聖地みたいなことを言われているところでもありますけれども、資料に「本質的に、観光業はアムステルダムにとってプラスです」ということを明記してあるわけですね。観光客を全部閉め出せということではなくて、あくまでツーリズムが大事だということを認識した上で進めているということは、とても大事なことだというふうに思います。車にしても何にしても、いい面、悪い面があるわけですし、そういったことをちゃんと手当てしていくことが必要だということがスピーチからうかがい知れたところかなというふうに思います。

2つ目です。今回御紹介いただいたところ、ヨーロッパが中心だったと思いますけれども、実は全てデータを取って進めています。ほとんど全てがそうですね。データというのは、今回最初に東京都さんから来年の施策の御紹介がありましたけれども、混雑緩和ですとか、そういったことだけではなくて、需要予測ですとか、いろんなことに全ての政策の起点になるというふうに思います。ですので、これからきっちりデータを取ってやっていくということが、この具体的な施策、観光と生活の調和についての具体的な施策、あるいは2番目に書

いてある持続的な成長のために、とても大事になるというふうに考えております。

最後ですけれども、では、具体的な打ち手は何かというと、冒頭に申し上げましたように、既に日本だけじゃなくて、日本もそうですし、先ほど田川委員からも御紹介ありましたし、世界中で既にいろんな打ち手がありますので、ただし、処方箋は各地域や各地域の状況によって全然違うと思いますから、参考にできるところはいろいろあると思いますけれども、いろんなところの事例を参考にして、具体的に進めることは十分に可能かというふうに思います。

いずれにしても、私がここに参加させていただいている理由の1つは、多分デジタルの面だというふうに聞いておりますので、今後、政策で掲げているところを強力に進めていかれることがとても大事かというふうに思いますし、先ほど御説明いただいた中には、東京都が各地域を支援しながら、自治体や観光協会を支援しながらやっていくというところを書いてありましたけれども、実は自律的に各地が各地域の課題に対応するのはとても大事ですけれども、やっぱり人手不足で、なかなか専門的な知識を持った人が十分にいないということもあると思いますから、東京都が主導権を持って各地を支援しながら一緒にやっていくということも、体制としては大事なかなというふうに考えています。

以上です。

【篠原座長】

重要な視点の提示、ありがとうございました。

続きまして、田中委員、よろしいですか。

【田中委員】

ありがとうございます。今日は後藤様にも大変重要なプレゼンテーションをいただいて、大変ありがとうございました。

これまでの御説明の中で、東京都においては打った手が、ナイトライフとか江戸文化とか全部成果が出ていて、すばらしいなと思うところ、これはニーズを捉えながら、また質の向上を果たしていただきたいなというふうに思います。

そもそも観光についての有識者の皆さんの議論のベースには、持続可能性というのが大変大きなキーワードとしてありまして、これは観光される訪問者と都民生活との調和というのがベースですし、観光客と住民との持続可能なつながりをいかにつくっていくかということが軸としてはあったというふうに思います。地元の経済とか文化とか環境が目に見えて向上していくということが目指されるべきですし、その結果、こういうアワードなんかもいただけるということになるのかなというふうに思っております。

互いの理解というのはやっぱり重要で、住民に対してということであれば、今日もお示しいただいた宿泊税の、循環が見える化するということがポイント

で、これを明確に住民の方々のニーズにも対応している仕組みであるということがすごく重要だと思いますし、先ほどの色々な政策を打つことも、意思決定のプロセスを見せるというお話も後藤先生からありましたけれども、そこも税の循環の見える化の中には意識していきたいなと思います。

2つ目は、私、最近、地下鉄にも乗っていますし、観光客の方、銀座の街とか表参道の街でもよくお会いするんですけど、昔は絶対よく道を聞かれたんですけど、最近誰にも聞かれなくなって、みんな若い人に聞いているのかなとも思っていたんですが、そうでもなさそうで、スマホがあるから、そういうコミュニケーションがすごく減っているんですよ。そうすると、観光客の方とちよっとお話をする、「どこからいらしたんですか？」とか、少し話をするので、「あっ、観光客の人だ」みたいな気持ちも高まったんですけど、今そういうことがないというふうにもなってきたので、そこはぜひ意識をして、体験とか交流が進められるような、色々なプログラムというのをもっともつつくてもいいのかなというふうに思います。「お子さん、何歳？」とか「どこから来たの？」というだけでも全然コミュニケーションって変わるんじゃないかなというふうなことを思っています。

3つ目は、困りごととか問題とかがあったときにも、住民の方から今後、観光客の方について、こういうことがとかというのが、お声が出ると思うんですけども、それに対してもアプリか何かでしっかり対応して改善ができて、それも多くの人にも、こういう問題が寄せられたけれども、解決の方向に向かっていきますよということがタイムリーに情報共有できるというか、そういうふうな環境も重要で、これも意思決定のプロセス化になると思いますけども、ここも重視していくといいかなというふうに思っております。

あと、観光客の方向けには、文化体験の交流のプログラムとか、先ほど小池都知事もおっしゃっていた、お祭りに毎年来られるというリピーターの方というお話がありましたけれども、観光客の方にマナー改善とか、そういう感じで体験してもらうのはハードルがなかなか高いと思いますので、それも含んだ文化とか、江戸東京文化とか、東京の環境に関してとか、そういうふうなことを前面に打ち出した体験型のマイクロツーリズムとかメニューができるといいんじゃないかなというふうに思っております。

今回お話をいただいて参考になったのは、住民の方の特典とか、訪問制限の時間とか、あとは教育のビデオを見てもらうとか、こういうこともいいところは取り込めるなというふうに思いましたし、とはいえ、そこから何か不満がたまっているとか、お互いに、そういうふうなことの事例もあれば、またぜひ研究して、取り込むことができればなというふうに思います。

今日出たキーワードを2つほど、その中でちょっと思ったのが、ジェントリフィケーションというのがありまして、私もまちづくりの観点で幾つかの本を

先日読んだんですけれども、都市開発が地域の人々の生活やアイデンティティに与える複雑な影響というのをどう理解するかというのはすごく重要で、例えば歴史的建造物のリノベーションをするときに、住民の住宅の確保をどういうふうにバランスを取っていくかみたいなこともあるかと思いますし、そういう事例が東京都の中でもいろいろ出れば、そういうこともお示しして、住民の理解を図っていくことができるかなというふうに思います。

最後に1つ、住んでよし、訪れてよしという言葉は、幾つかあるか分からないんですけど、すごい昔から日本にはあって、日本古来の考え方でもあると思いますので、色々な地域の内容の理解とか解釈とかあるようですので、ぜひ最先端都市・東京の住んでよし、訪れてよし、もう1つ何かつくかもしれないんですけど、こういう東京スタイル、東京の観光の受け入れ方と住民の共創による発展みたいな、この明文化もスローガンみたくしていけるといいかなというふうに思いました。

以上、よろしくお願いいたします。

【篠原座長】

ありがとうございました。重要なキーワードを幾つか御提示をいただきました。

続きまして、アトキンソン委員、お願いしてよろしいですか。

【アトキンソン委員】

プレゼンテーション、ありがとうございます。

重要な、海外はどういう取組をしているのかというところは、いろいろヒントがあったかと思いますが、その中でやはり今の次元を考える必要があるかと思います。調べてみますと、2024年の数字で、インバウンドは、オランダの国民に対して113.6%、バルセロナがあるスペインの場合は176.1%、イタリアは97.4%のインバウンドが人口に対する比率になっているところで、日本は3分の1しかない。政府目標の2030年6,000万人になったとしても半分ということになりますので、アムステルダムにしても都心だけで95万人、それに対してインバウンドは800万人が来ているということで大変な割合になっていまして、アムステルダム全体で250万人ですので、3倍を超えています。それに比べると、東京23区で995万人ぐらいだと思うんですけど、東京都全体として1,427万人ぐらいですので、比較にはまだ早過ぎると思いますので、こういう比較はどこまで参考にするべきものなのかどうかという議論は、大いにその議論の余地があるかと思います。

言うまでもないんですけど、オーバートーリズムの定義というのは、訪れる観光客とそこに住んでいる住民の双方の評価、住民だけの評価ではないということが一番ポイントになっていまして、同時に部外者の評価はそこに入っておりません。私としては、京都の色々な観光関係で、あと、住民の1人でもありま

すけれども、見ると、断片的に悪い例を取り上げて一般化して言っているネットの人たちのエピソードを見てみますと、ほとんどの場合は部外者でありまして、住んでいない以上は黙りなさいというふうに思います。

ネットでオーバーツーリズムを言っている人たちの属性を調べたことがあるんですけども、ほとんどの場合は特定の国に対する拒否反応の強い人が多くて、その中で実は観光地ではない住民が多いんです。指摘されている問題に対応しなきゃいけないことは事実ではありますが、これに対して、ネットで騒いでいる分に対して過剰に対応する必要はないですし、逆にそういうような風説の流布的なものもつぶしていくべきものじゃないのかと思います。

その中で別な観点、やはり諸外国で何がポイントになるのかというのは、対応していることなんですよね。ですから、最近山梨で桜まつりをやめると言うニュースがありました。その祭りは誘致をするtが目、10年前から自分たちがやり出したことであって、今度はそれをやめるということになっていきますけども、マナーの問題というのは、トイレ関係の問題だとか、いろいろ言っていますけども、それはマナーが悪いということじゃなくて、トイレを設置していない誘致をした人のほうが悪いと思います。それはインバウンドや国内の観光客のマナーが悪いんだとか、住民に迷惑だって言っているんですけど、そうではなくて、行政の対応がひど過ぎるだけの話なので、冷静に考える必要があると思います。

今日はせっかく年始初めての会議ですので、今年の予想に関しても一言申し上げておきたいと思います。先ほど知事のほうからお話がありましたように、去年は4,268万人のインバウンドで、前年対比で15.8%の増加になりまして、580万人が増加しました。その中で、中国は30.3%の増加、中国を除くアジアは8.2%の増加、アジア以外の俗に言う欧米豪を含めた地域は25.7%の前年対比の増加になりました。2026年の場合は、中国を除くアジアは8%の増加を見込んでいます。それで、アジア以外は約23%の増加になると予想していますので、合わせると、中国が減っている中で、計算上では中国からのインバウンドが45%減になったとしても、今年の予想に関しては大体横ばいになると思っています。

それで見ると、本来は2030年の6,000万人目標は、政府目標としては堅持されているとは聞いていますけれども、残り5年間で平均して7%の毎年の増加になります。2026年、横ばいだということになると、横ばいから2030年までの6,000万人ということになりますと8.9%の年率の増加が必要になっていきます。

1つとしては、言っておかなきゃいけないポイントは1月の統計の話ですね。今月の半ばぐらいでJ N T Oから出てきますけれども、去年で、中国からのインバウンドが、春節が珍しく1月だったということで98万人だったんですけど、普通ですと今年も2月ですので、そうすると、異例の増加だった去年ですので、下手をすれば、今年は1月で中国からのインバウンドは、例えば6割減だとか

7割減とか十分にあり得るんですけれども、そうは言っても2月のリバウンドがありますので、1月の数字を見てギャーギャー騒ぐ必要はないというふうに思います。

最後になりますけれども、6,000万人の目標に向けて、今、日本政府観光局が新しいグローバルキャンペーンを今つくっている真っ最中です。春・夏から始まりまして、それでグローバルキャンペーンを全面的、全力で取り組んでいきますので、6,000万人に向けて、さらなる誘致をかなり力強くやっていく流れになっています。その中で、先ほど申し上げたように、去年は中国が30%増だったので、今年は見込めない、政権との関係もありますので、そういう意味では、中国を除くアジアの8%増にしかならないということが気になるころであると同時に、アジア以外のところで23%増という非常に好調な増加が続いていますので、都のほうでも、やはりアジア以外、それに中国を除くアジアを中心に、さらなる誘致にお力添えをお願いしたいと思います。あとは、オーバーツーリズムという言葉を使うこともなく、対応だけはしっかりとやっていて、あまり断片的な、あおりの的なものを順番につぶしていただければと思います。

以上です。

【篠原座長】

ありがとうございました。非常に客観的な視点で物事を見ていこうという重要な御提言だったかと思います。

続きまして、堀口委員、お願いできますでしょうか。

【堀口委員】

私は江戸東京というところをテーマに活動させていただいておりますので、都知事はじめ東京都の皆様によって、江戸の歴史文化を活かした観光の推進というのを力強くやっていただいている、一都民としても本当にうれしく思っております。

今回は私、この江戸東京マップの監修をさせていただいたんですけれども、まさにそのときに意識したのが調和ということでして、というのは観光客向けだけにしたくないというか、内容につきましても、地元の方などが手に取ったときに、これだったら自信を持ってこの内容を皆さんにお伝えできるなという内容にしたいなという観点で監修をさせていただきました。

具体的に申し上げますと、マップの一番最初が浅草寺になっているかと思うんですけれども、浅草寺様の628年創建というふうに始まっている部分が、最初の案ですと建立になっていたと思うんですね。同じようなニュアンスの言葉なんですけど、建立にすると建物がその時点で建っていたというふうに伝わらないとか、そういう部分を細かくディスカッションさせていただいて、観音様の御示現のお話というのは地元でも本当に大切にされていることですので、何という言葉を選択したら外国の方にも観光客の方にも分かりやすくその二

ュアンスというのが伝わるのかなというようなところをディスカッションして言葉を選んだという背景がありまして、本日のテーマもまさに観光と生活の調和というところで、後藤さんからすごく示唆に富んだお話をいただいたところであるわけですが、私の中で、これはちょっと江戸とは離れるんですけども、最近感じていることがあって、外国人観光客の方のマナー問題というのはかなり取り上げられるようになってきていると思うんですけど、一方で、観光客の皆様を受け入れる側の啓発というの、もしかすると必要になってきているのではないかなというような感覚を私自身が、お客さんとして飲食店であったりとか、色々な商業施設などに行ったときに感じるが増えてきたなというような実感がありまして、例えば先日なんですけれども、飲食店で「お手洗い、どこにありますか？」とお伺いしたことがあったんですけども、「分かりません」でその会話が終わってしまったことがありまして、恐らく私が考えたのは、ずっとそこで働いていらっしゃる方じゃなくて、スポット的に働いていらっしゃる方だったので、仕方ないなとは思ったんですけども、もしこの場で災害が起こったときに非常口に御案内できるのかなとか、そういったことを考えたときに、ちょっと怖くなった。要は丁寧な接客というものがもしかするとおろそかになってはいないかという部分を根本的な問題としてちょっと感じる機会が増えたんですね。ですので、日本のホスピタリティというものは観光においても非常に高い価値があって、それを求めて日本にリピーターでいらっしゃってくださる外国人の観光客の方もいらっしゃると思いますので、そういったニーズに応えるためにも、受け入れる側の都民であったりとか、接客というのは特に観光の最前線だと私は思っていますので、そういったところの意識というものを1回ちょっと立ち止まって考えてみるのもありなタイミングなのかなんていうふうに思っております。

そういうときには、先ほど田川委員からも御指摘があったように、江戸という街は、地方からたくさんの方がやってきて、そこで何とか調和しながら暮らしていた街ですので、相手に対して丁寧に接するという意味での接客が自然にマナーとして培われていたんですね。そういったような江戸のマインドというものを観光だっけに還元していくというような、もしかすると長期スパンになるかもしれないですけども、そういった江戸のマインドというものを今後観光に取り入れていくというようなところが、もしかすると、また江戸が一つ東京都のお役に立てるところなのかなんていうふうに考えました。

ますます今後、江戸東京博物館のリニューアルであったりとか、来年は大河ドラマがまた幕末ものになりまして、江戸が舞台になりますので、ますます江戸に注目が集まると思いますので、そういったところでお役に立てればなと思っています。

【篠原座長】

ありがとうございました。かつての江戸のマインドを思い起こしてはどうかというような御提案でございました。

続きまして、牧野委員、お願いできますか。

【牧野委員】

まず後藤さんのプレゼンテーション、ありがとうございました。海外の具体的な事例をいろいろ教えていただいて、すごく参考になるなと思っていました。その中で、多分今日お答えいただく時間はないのかもしれないですけど、対策に対する実際の効果で、特に住民側の反応がどうだったかなというところについては、また教えていただければなと思ったというところが感想でした。ありがとうございました。

その上で、ほかの事務局のプレゼン等についてのコメントをすると、まず一昨年くらいですね、関わらせていただいたナイトタイムのところで世界の都市総合ランキングで、ナイトライフ充実度が1位になったというのはすごくよかったなと思っています。もともと分科会をやらせていただいているときも、これが1位じゃないにしても低いのはおかしいんじゃないかなという課題感から考えていて、どうやって東京の夜の魅力を知ってもらおうかということが課題だと思っていたので、今日いろんな対策についてもお話しされていましたが、引き続きコンテンツの充実と発信をしていって、このランキングを維持していただくことをやっていただければなと思いました。

江戸についても、ちょっと思ったところがあって、昨年アーティストの村上隆さんがジャポニズムという、浮世絵から始まる西洋美術への影響を、改めて取り上げられていて海外で展覧会をやられていたので、また浮世絵が注目されるのではないかなと思っています。せっかくの機会なので、江戸を紹介していく中で、例えば広重の「名所江戸百景」の場所がどこかみたいなこととかというのも紹介すると、関心があるのではないかなと思いました。

あとは、江戸博のリニューアルですね。以前トリップアドバイザーで働いたとき、江戸博は非常に外国人のお客さんが多く来られていて、また、評価のものすごく高いところだったので、せっかくそういった場があるので、江戸の魅力を知ってもらったり、また、そこから江戸を実際に体験していただくようなガイドツアー的なものとか、場所を紹介して、そういった発信地になるといいなと思って、リニューアルを楽しみにしています。

あとは2点、観光と生活との調和についての部分なんですけど、分散化の問題を取り上げられていましたが、たまたま墨田区、江東区と観光に関わる機会があって、やはり区のレベルにおいても、例えば墨田区だったらスカイツリーに集中していたりとか、あるいは江東区だったら豊洲地域に集中していたりとか、集中と分散というのは課題かなというふうに思っています。なので、様々な取組をしてどうやってスカイツリー、豊洲以外の魅力を知ってもらおうかみたいな

ことを観光でやっていると思うんですが、一方で今日の課題になってくるような、分散化すると住民の生活に近いところに人が行くようになるというところがあるので、観光に対する理解を地域でしてもらおうということがすごく大事だと思うので、この点はきっと丁寧にやらなければいけないところだなと思っています。その中で、後藤さんのプレゼンにもあったような、京都市さんの観光効果の可視化みたいなものも効果があると思うので、そういったこともやっていくといいかなと思っています。

持続的な成長に関しては2点ありまして、1点はA Iのデータ分析の話が出ていたんですが、A Iが出てきたことによる旅行者の行動変容が起こると思っています。今まで検索を見てとか、ソーシャルを見てというところに来ていたお客さんが、A Iで紹介された場所に行くみたいなことになっているとは思っていて、先ほど田中委員が道を聞かれなくなったという話をされていましたが、自分自身の経験で言うと、海外の同僚とかが日本に来るときに、よく東京でどこか行く場所を紹介しようとか、観光地とか食事とか紹介しようとかいうことを言っているんですけど、本当にこの1年ぐらいで、A Iで聞いたから大丈夫って断られるようになってきて、なので恐らくそれは今後もっと広がっていくと思うので、どうやってA Iを見ながら観光する人たちに対して観光情報を届けるかというところが課題だと思うので、そこは考えなきゃいけないかなというようなことだと思っています。

2点目が、これは田川委員からも御指摘があったところで、僕自身もちょっと思っていたところなんですけど、観光人材の育成と、恐らく先ほどの話だと地域住民の人たちを巻き込むというところに、参加してもらおうというところに関係あると思うんですけど、中学生、高校生とかに何とか観光に関わるようなこととか、地域を知る機会をつくってもらって、そこからやらなければいけないんじゃないかなというのを課題感として思っているところです。いくら大学で観光科があったところで、高校の時点で観光科に行こうとまず思ってもらわなきゃいけないことを考えると、早い段階で観光とか地域に興味を持ってもらうことが必要かと思いますので、そういった点も、直接観光課がやる取組ではないかもしれませんが、何らかできるといいなというふうに思っています。

以上です。ありがとうございます。

【篠原座長】

ありがとうございます。大変色々な観点からの示唆に富む御意見、ありがとうございました。

続きまして、根木委員、お願いできますでしょうか。

【根木委員】

皆さん、こんにちは。まず後藤さん、素敵なプレゼンテーション、ありがとうございます。

今回、観光と生活の調和ということで、前回の会議で僕、アスリートたちと活動している日本財団HEROsという、アスリートがスポーツを通じて社会課題を解決するということでいろいろやっていたので、スポーツイベントの話を、F1で結構サステナビリティのことをすごくやっていたということであつたりとか、最近やっているBリーグとかJリーグの中で、スポーツイベントです、去年は世界陸上があつたり、デフリンピックがあつて、世界中からこの東京の都市に集まってきた中で、例えばペットボトルを持ち込み禁止にしたりすることによって、環境に配慮したというものをすごくやられていますよね。今日話を聞きながらも、スポーツを通じて社会課題を解決するというのと、ポジティブに観光を通じて社会課題を解決するという、ポジティブにということが結びつくなということを改めてすごく感じることができました。今もまさしくミラノで冬季オリンピックをしているんですけども、やはり新たな取組の中でサステナビリティをしっかりと考えているということ自体が、イベントであつたりとか、人が集まるところに、そこを配慮するというのはもう当たり前になってきているんだなということがすごく感じることができました。

あと、今日ちょうど、まさしく午前中なんですけど、僕、江東区の有明西学園という小学校に講演に行っていたんですね。そもそも環境についての話なんかをスポーツとということですからことだったんですけど、実は午後から観光のこの会議に出るので、テーマが、色々な課題があるんですよと子どもたちに言ったら、実は一緒に考えてくれて、そういうことで何ができるのかということで、もちろんサステナビリティのことで、いっぱいアイデアが出たんですよ。まず、ごみをあんまり出さないようにしたらいいよねということであつたりとかということと、あと、子どもたちは今では当たり前のようにマイボトルを持ってきているから、でも、給水所がもっとあつたらいいよね、分かりやすいほうがいいよねということで、今AIで調べて、僕もやったら意外にあるんだなということも分かったりしたんですけども、実際、でも分かりにくい方法があつたりとか、あと、アプリが今、mymizuというアプリ、御存じの方おられますかね、すごくいいのがあつたりするんですよ。それを使って、多言語にもうまく活用できているし、それをつくるとポイントになったりするものがあつたりとか、要はみんながそこで色々なことを活用することによってポイント制になっていて、人が集まるほうが、それを使うことによって、色々なポイントになって、色々な還元ができるとかというものもあるのがすばらしいなというふうに思いました。

オーバーツーリズムという言葉をあえて使うとすれば、そうすることによってネガティブな要素が多そうな気がするんですが、人が集まるということによって、環境の中で、よりきれいなとか、環境に通じた観光ができているんだということのプログラムみたいなものができることによって、表彰されている東

京のすばらしさというものをもっと発揮できるのかなというふうに改めて思うことができました。そういうことをどんどんこれから進めていけたらなというふうに思います。

あとは、これもスポーツ界の中で僕たちが感じたことなんですけども、要はＪリーグとか、アンケートも調査しているんですけども、その大会会場にゴミを捨てないように、持って帰るとか、マイボトルというのをやっているんですけど、もちろんその中で、大会のそのときだけではなくて、それが結果として行動変容が起こるということがすごく出ているんですよ。そういうことをすることによって、日頃の生活の中でポイ捨てしないとか、活用する、物をリユースするとかというものになっていくという、そんな中をこの観光の要素の中でうまく取り入れられると、とてもいいのかなというふうに思いました。

あと、これも田川委員が言われた子どもたちの、僕も講演をいろいろやっているんですけど、こうやってアイデアがすごく出ると、子どもたちは既に、僕たちは途中から、レジ袋有料みたいなものは途中からなった世代だと思うんですけど、彼らは当たり前になっていますよね。なので、アイデアも全然、僕らの出し方と全然違うし、ポジティブに色々なことを考えられていると思うので、そうやって引き続き教育をし、また、子どもたちからアイデアをどんどん持ちながら、我々がしっかりとそれを進めていくということを感じました。

以上です。

【篠原座長】

ありがとうございます。学校教育を観光の発展に結びつけていこうという、幾つかの委員から同じような御意見もいただきました。ありがとうございます。

それでは、山田委員、お願いできますか。

【山田委員】

後藤さん、東京都の事務局の方、すばらしいプレゼンテーション、ありがとうございました。

私のほうからは、観光と生活の調和について具体的に何をするといいのかという具体案を考えてみました。どう守ってもらうかというところですが、ごみにしても、マナーにしても、立入禁止地区とか、いろいろあると思いますが、シンガポールとかは、まずインバウンドという飛行機に乗って空港に来るということで、シンガポールエアラインとチャンギ空港にものすごく力を入れて、予算もかけています。日本は島国ですので、必ず飛行機か船で来なければならないところで、日本のマナーを押しつけるのではなくて、江戸からのという文脈も加味し日本の文化を学んでもらうコンテンツみたいなものを、先ほど牧野委員からもあった浮世絵なのか、今日本で人気のアニメャラなのか、みんなが見たいと思うような簡単なコンテンツを飛行機内で、機内だと皆様いろんなものを見てくださるので、発信するというのとは一つありかなと思いました。日

本のマナーを守りましょうではなく、あくまで日本文化を知ってもらうという形の中でマナー啓発をしていくというのは、一つあると思います。

その中で、持続可能な観光を目指してというところで、ちょうど今日も午前中、東京都がなさっている関係のサステナブルアワード、表彰式へ行ってきましたが、サステナブルは環境もそうですし、それを続けられる経済的な、きちんと回るという、いろいろな意味のことがあると思いますが、どちらかというと皆様、地域、地方というところが頭に浮かぶ方は多いと思いますが、都市型の東京ならではの、都市型のサステナビリティというところもきちんとうまく出していったらいいんじゃないかなと思います。

混雑などに関しましては、先ほども皆様から出ていますが、データドリブンで、AIをきちんと最大限に活用しながら正しく正しい場所に使っていくことが大切だと思いました。

今後の東京都の観光ということで、ちょうど先週ロサンゼルスグラミー賞に御招待いただいて出席してきましたのですが、グラミー賞も今アジアに持ってきたりとか、いろんな話があり、海外14年間いろんなところに住んでみて、このためにこの国に来るというイベントが結構海外にはあります。日本はどちらかというと、自然も素晴らしいですし、景色も素晴らしい、食もおいしい、温泉もいい、桜もきれいという、もともとあったコンテンツをうまく活かしているとは思いますが、このために来るみたいなイベントがなかなか弱いなと思っています。AIの活用もあって、いろんなプロモーションの仕方もあるので、今、日本に来る1位、食というところで、例えば世界のベストレストラン50みたいな、世界のコンテンツを持ってくるというのも一つですし、自分たち独自のIPをこれからつくっていても、食やアニメとかというところでは勝てると思っています。ちょうど今、サウス・バイ・サウスウエストみたいな、世界最大の食フェスをやろうという動きがありまして、食×スポーツ×医療みたいな形で動いているのですが、例えばその小さい版を、ナイトタイムエコノミーの話もありますので、せっかく都庁で既にプロジェクションマッピングをしているのであれば、そこに合わせてナイトマーケットのようなものをするとか、アジア諸国どこもナイトマーケットが人気ですので、ロサンゼルスとかでもありますし、そういうようなことを今あるものを活かしながら何をするか、先ほどの後藤委員の他国との比較というところも込みで考えますと、プラスになるのではないかと思います。

以上です。

【篠原座長】

ありがとうございます。この国にこのイベントというのは重要な視点のような気がいたします。

それでは、最後にマリ委員、お願いしていいですか。

【マリ委員】

遅れて来まして失礼しました。

課題が大変大きくて、先ほど後藤さんの説明、とてもよかったと思います。1つ聞きたかったんですけど、バルセロナの場合はゾーニングで分けて、観光の多い地域とそうじゃない地域と、住まれるということの中で、日本のゾーニングってしっかりしていないじゃないですか。住宅地の中でも何でもありみたいな状況の中で、そういうエグザンプルを日本に当てはめたときに、ぐちゃぐちゃになっちゃうんじゃないかと思うんですけど、いかがでしょうか。

【後藤氏】

東京は、ビジネスの場と生活の場がかなり近く、逆にそれを魅力として、価値として捉えるのであれば、どういう受け入れ方をしていくのか。分離ではない形を考えていく必要もあるかと思います。東京といってもいろいろだと思います。各地区で地域の方、働く方がどう受け入れていきたいのかをまず固めていくのかなと思います。

【マリ委員】

ありがとうございます。本当におっしゃるとおり、地域地域によって取り組み方って全然違うと思うので、東京都を考えたときに、何を一番重視して観光と生活の調和がとれるかということの中で、私はあんまりそれにフォーカスし過ぎてしまうと、一般の都民の生活のほうに逆に脅かされるんじゃないかと思うんですね。

例えば、私は観光が専門といいますか、大学でそれが専門分野だったんですけども、ディズニー・ワールドという、アメリカのフロリダ州にあるんですけど、フロリダに住んでいる住民の方々はディズニー・ワールドの中では年間、レジデンスパスというのがありまして、住民用の価格、ですから特別に、住民の方々に迷惑かけている分、安くしてさしあげてという、そういうことをやっていたりとか、あとはナッシュビル・テネシーという、私が大好きなカントリーミュージックの街なんですけれども、ナッシュビルに行きますと、ボランティアさんで結構定年退職された方々をナッシュビル・ダウンタウン・アンバサダーという、それこそ東京都のシティボランティアみたいな感じで、ちゃんとしたトレーニングっていいですかね、観光客が多いので、自分が今日暇だから、じゃそのシャツを着て歩いて、観光客の方々にアンバサダーとして、誰が見ても、この人はアンバサダーだというふうに分かるようにして、それで街の案内をしてあげるとか、そういうことをすることによって地域の方々も参加できたりという、何かこういう、東京都というのは全て観光で埋まっている場所だけじゃなくて、むしろちょっと過疎的な地域も、グレーター東京にはたくさんあるわけで、観光客に来てほしくても来てくれないような地域もあるわけですので、そういうところをもう少し、いいまちづくりをすることによって歩けるマ

ッピングをしてさしあげるとか、もてなしもすごく日本人はもともとあるんですけれども、私、びっくりするのは、たまに「No Foreigners No Speak English」という看板が書いてあって、英語ができないから外国人は入ってこないでくださいという小さなお店があるんですね。それでも、日本語ができる外国人が行くと、いいよって入れてくれるんですね。ただ、それ以外の単語を、ボキャブラリーを持っていないから、「No Foreigners No Speak English」と書いてあるような看板を見ると、外国人とか観光客にとって非常に威圧的な感じはするんですけれども、ただ、私たちも海外に行って旅行したりとかするときには、初めて日本に来るとか、また、初めて海外に行くときというのはアドベンチャーなんですよ。だから、そこでたとえ大変な思いをしても、それが土産話として、ねえねえ、私、どこどこの国に行って、こんなことがあったんだよ、あんなことがあったんだよというふうに言われるような、話せるような、そういう土産話にもなるし、あんまり手取り足取り、観光で全て施策をつくってもてなそうとするのではなく、むしろ住んでいる地域の住民の方々が、いい街の中に自分たちが住んでいれば、人って自然に寄ってくるわけで、人が多く来たときに、それをどう対処していくかということは時代時代によって違うのと、2017年以降は、ヨーロッパがなぜオーバーツーリズムが始まったかという、リベンジツーリズムで始まったわけなんですね。コロナの後に、とにかくみんなが圧迫感を感じて、どっかへ行かなきゃということでワーッと世界中に、色々なところへ行くようになりましたので、次パンデミックが来たら誰も来なくなってしまうときも、なきにしもあらずなんですね。ですので、あんまりつくり過ぎて、色々な形に入れるような状況にするよりは、生活者にとっていい街、私が一つ気になるのは、私も東京にたまに泊まりに来るんですけれども、ホテルがとっても高いんです。一時、例えば普通にビジネスホテルでも5,000円で泊まれていたのに、同じ5,000円のホテルが今3万円になっていて、高級ホテルがちゃんとあるにもかかわらず、何でこういうホテルが高級な値段になっているのでしょうか。だから、例えば東京都の自分たちが生活している都民として、または周辺地域の、例えば神奈川とか埼玉とか、そういうところから来られる方々が仕事とか、観光客が、自分のお客様が来たとか、そういうときに東京都の自分の住民票を見せれば、もうちょっとリーズナブルな価格で泊めていただけるようにするとか、観光税を払わなくてもいいですよ、あなたたちはもともと税金を払っているからとか、何かそういうインセンティブというんでしょうかね、私たちは東京都民として、こうやって観光客が来ているけれども、来ても私たちは普通の生活を価格的にしていられるんだという、何かそういう施策を逆につくっていただけると、観光だけに向けてではなく、生活者が、観光客が来てもしようがないわね、これは私たちのためだからと思えるような、何か色々な仕組みをつくっていただけるといいなと思います。

【篠原座長】

ありがとうございます。暮らしぶり、なりわいをそのまま見てもらうのもいいんじゃないかというふうな御提言だったかと思います。

あと、本日御欠席の委員からも事前にコメントをいただいております、事務局から御紹介をいただけますでしょうか。

【前田観光振興担当部長】

本日欠席した委員からの主な御意見を御紹介いたします。

石井委員からは、旅行者が嫌な思いをしないよう、受入側となる住民の意識改革も必要である。ナイトタイム観光の充実に向けて、旅行者がもたらすごみなどの影響の未然防止、有事や健康上の問題があったときの環境整備を進めるべきである。ファミリー層のニーズとして、子どもの預け先やサポートに関する情報があるとよいと思います。

石川委員からは、旅行者に向け情報発信を強化できるよう、情報が届く手段を考える必要がある。アニメなどのコンテンツを体験したりイベントに参加した人が、その後に都内を周遊できるような仕組みをつくる必要がある。多摩・島しょなどにおいても独自の歴史・文化があるということを理解してもらい、アクセス情報を知らせることも重要だ。

小巻委員からは、トイレやごみの問題がクリアされている観光地が旅行者に選ばれるという認識が必要である。先進的な自治体の取組が都内全域に波及していくことが重要である。マナー啓発に当たっては、飛行機内のモニターや電車内のサイネージ等、旅行者の目に触れやすい媒体を活用して、動画を使って発信することが効果的ではないでしょうか。

そして、星野委員からは、旅行者の満足度を調査し、国別・年齢別・時期別等適切にセグメントした形でデータを整備する。そのデータを活用して、プロモーションや施策を行うべきではないでしょうか。夏の暑さによって旅行者の満足度が低下するおそれがあるので、旅行者に情報提供を行いつつ、それを補う施策展開が必要ではないか。宿泊税はできるだけシンプルな制度設計としてもらいたいという意見でございました。

事務局からの説明は以上です。

【篠原座長】

ありがとうございました。

私自身は、多くの旅行者が訪れてくれるということは、実は大変いいことなんだという、そこをまず大前提に立った上で必要な対応を取っていくということが大事かと思っております、今日、取組の視点は委員の皆様から大変貴重な御示唆、それからキーワード、たくさん出てまいりました。来年度は東京都のほうで、また新しい東京都の観光政策の議論が始まるようですし、その議論にも今日の議論は大変参考になるものがたくさん詰まっていたかと思います。

まだまだ御発言になりたいと思いますが、時間の制約もありますので、一旦ここで進行を事務局にお返ししたいと思います。お願いいたします。

【江村観光部長】

本日は貴重なお話を賜りまして、ありがとうございました。委員の皆様よりいただいた御意見につきましては、今後の施策に活かしてまいりたいと考えております。

事務局からは以上でございます。

【篠原座長】

ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして本日の会議を終了いたします。

本日はどうもありがとうございました。お疲れさまでございました。